

クルーで参加した1年生の思い

一年生 中野 玄基

10月26日から10月30日まで、5日間行われた関関同立戦に、クルーとして前半の3日間参加しました。今回はその3日間を通して自分が感じたことや反省を書いていきたいと思います。

まず、自分が大会を通して一番感じたことは、グライダーの競技を行う上で、個人の技術だけでは勝てないということです。この大会に行くまでは、グライダーは一人で飛ぶわけだから、グライダーの大会というのは、チームプレイというよりも、個人の技術の面がかなり重要なのではないかと考えていました。その考えも、飛んでしまえば、あとはその選手の技量や判断次第のところもあるのであながち間違いとは言えないのですが、大会に参加し、生で大会の空気に触れると、チームワークというもの、それと同じかそれ以上に大切だということがわかりました。

自分がそう考えた根拠はたくさんあるのですが、その中から自分の心に大きく残っているものを、自分が体験した出来事と共に書いていきたいと思います。

その根拠とは、「情報の共有」です。関関同立戦は、簡単に言ってしまうと、時間の許す限り飛んで、より多くの旋回点と滞空点を取った学校が勝ちになります。そして、1つの大学が1日に飛べる発数は、多くとも20発ほどです。その限られた発数の中で、他大学と差をつけるためには、一発一発の質を高めることが大切だと感じました。そこで大切になってくるのが、情報だと自分は思います。情報と言っても多岐にわたります。上空で言えば、現在のサーマルや沈下帯の状況、地上から地図を見ただけではわかりづらい上空での対地目標を、地上で言えば、現在の風向や風速はどうなっているのか、上空の機体がどこでサーマル

を捕まえていたのかなどなど挙げていけばきりがありません。そういった情報を次にフライトする人に伝え、質を上げることが大切であると自分は思いました。

自分がそう強く思うようになったのは、大会3日目のことが原因です。その日は、日射しがあまり強くなく、5メートル前後の正対風の吹くコンディションがいいとは言えない1日でした。実際、上空が上がっても良いサーマルを捕まえることができず、5分前後で降りてきてしまう機体が良く見受けられました。正直に言うと、自分は、記録があまり出ない展開に、少し気持ちが落ちてきていました。ですが、それも途中までのことでした。ふと、周りを見てみると、誰一人として気持ちが落ちているようには見えず、むしろ、このコンディションで、数少ないサーマルがどこにあるのか、どのルートで飛ぶのが良いのかなど、すごく試行錯誤している姿が見受けられました。それは、次に飛ぶ選手だけではなく、ランウェイワークをしている最中の人でもそうです。あそこにある雲の近くはサーマルがありそうではないかといった話を何度も耳にしました。そんな上回生の方々の姿を見て、こういった情報の積み重ねが、勝敗を大きく左右するのだと学んだと同時に、自分はこの3日間ただただランウェイワークをしていただけなのではないかと、とても恥ずかしい気持ちになったことを今でも覚えています。ですが、その反省により、今でも強く心に刻むことができていますので、自分の中では次に生かせるプラスになったと思います。

このこと以外にも、例えば、索が到着するぎりぎりまで、選手の人と作戦について話し合っているところや、緊張を和らげようと選手に話しかけ

ている方の姿を見たり、先輩方から直接教えてもらったりといろいろな体験を通して「情報の共有」の大切さを学ばせていただきましたが、やはり、自分を顧みることができた3日目の出来事が自分の中で一番大きく残っています。

ここまで、「情報の共有」ということを中心に、チームワークの大切さについて書いてきましたが、途中から自分の大会での反省のようになってしまったので、ここからは、実際に大会に参加してここが魅力的だなと思った瞬間についてクルー目線から書いていきたいと思います。

これに関しても、高度を稼いで、機体が旋回点に向かっていくときのドキドキ感であったり、学校という一つのチームの一体感を感じ取った時の胸の高鳴りであったりと、いろいろなことがあります。その中でも、自分が一番興奮したのは、高度が落ちてきた機体が、サーマルに乗ってグングン高度を回復した時です。

自分がこの瞬間に立ち会ったのは、またしても3日目のことでした。その時は、撤収1時間前くらいのことなのですが、かなり好条件が出始め、上空には同志社の機体を含む3機がフライトしていました。自分は、同志社の機体を目で追っていたのですが、途中で高度を落とし始め、一時は高度800メートルくらいまであったが、400メートルくらいまで高度を落としてしまいました。ここまでくると、機体がとても大きく見え、着陸も時間の問題ではないかと考えていました。しかし、その後、うまくサーマルを捕まえ、高度をどんどん上げていきました。あの時は、思わず握っていた手に力が入り、小さく声を上げてしまいました。次に大会を見る機会があるならば、もう一度体験してみたいと思いました。

自分は、大会に参加するまでは、大会というものをあまり実感しておらず、ふわふわしていました。ですが、今回の大会を通して、大会というものをより身近に感じ、2回生の方で大会に出て活躍している人を見ると、あと1年で自分もこの場所に立つかもしれないという焦りも感じました。自分は、まだまだ学ぶことの多い身ですが、今回で学んだことを生かし、自分も興奮する側からさせる側になれたらなと思います。